

大相撲九州場所観戦雑書メモ

< 1 > 北の湖逝く

この場所の賜杯の行方が面白くなりかかった日、「北の湖理事長逝去」の報が流れた。力士の生命は短か目だと昔から言われてはいるが、62歳での他界は少々早過ぎるような気もする。

私が自分のお金で国技館に入って生の相撲を見始めた頃は、北の湖や千代の富士が将来有望な若手力士として注目を浴び始めた頃だった。

「足の大きな子は将来大物になる」と言われて相撲や柔道の道に入った人がいた時代だったが、異常に発達した太ももの筋肉と尻の大きさに目を奪われた。「この太ももと尻の大きさは絶対将来大物になるに違いない」と勝手に想像した。それから数年後にはもう常に話題の中心にいる力士になっていた。私が目を付けた若手力士が予想通り大物になったので、うれしさ半分で随分応援したものだ。

やや反り身なのが気になったが、前傾姿勢と体重がかかった前進は「名寄岩の再来・怒涛の寄り」と恐れられるようになった。

後に第55代横綱となり、その強さと勝負に立ち向かう明確な姿勢がふてぶてしいと見られて、「北の湖負ける！」というヤジが飛ぶことも少なくなかった。通算成績 951勝 350敗 107休 (勝率0.675、休場を除くと0.731) 幕内成績 804勝 247敗 107休 (勝率0.694、休場を除くと0.765)、幕内優勝 24回。横綱在位 63場所の記録はまだ破られていない。

雲竜型の土俵入りは、近頃あまり見なくなった「下段の構え」で体軀や相撲っぷりのイメージとよく合っていた。

近代相撲の歴史を飾る名力士の一人であろう思う。



< 2 > 尻あがりの日馬富士と白鵬の足元

休場明けや怪我上がりの力士ばかりで誰が優勝するかの予想は困難な場所だったが、前半戦でやや不安が残る動きをしていた日馬富士が、後半速さと鋭さを取り戻して、千秋楽に敗れはしたが賜杯を手に入れた。両横綱の後に続くのが平幕力士という「大関不在」の場所は見慣れたが、何とかならないのかという苛立ちが残った。

前半の白鵬はいつもの安定したしかも鋭い動きの相撲が目立ち、7日目には隠岐の海を豪快な櫓投げで投げ飛ばし、12日目までは無敗で進んだ。しかし中日以降の相撲では、攻防の中で足が流れたり、つんのめったりする場面が目立ってきた。そして徐々に立ち合いの一步目の強い踏み込みが見られなくなり、

10日目には栃煌山を相手に猫だましが登場した。猫だましが古来、下位の者が勝ち目のない上位の者と戦う時に目くらましに使う戦術で、一般的には横綱が使う手ではないと言われてきた。数多くの文献等で相撲の歴史についても学習している白鵬のことだから、その程度のことは知っていたに違いない。それにも関わらずこの奇襲戦法をとらなければならなかった「何らかの事情」があったのではないかと思う。そして両足をそろえてその場でジャンプするだけのような軽い立ち合いになり、13日目からの連敗に至った。恐らく先場所の怪我がまだ十分に癒えている状態ではなく、日が進むごとにそれが表面化して、評判の立ち合いの深い踏み込みが出来なくなってきたように感じた。(左：照ノ富士戦 中央：鶴竜戦 右：三月場所12日目)



< 3 > 大関陣は予想通り

照ノ富士は先場所の怪我が回復していないままの出場で、相撲の流れを見る限り休場が妥当だったような感じがした。辛うじて勝ち越して9勝6敗。

稀勢の里は快調の嘉風に敗れはしたが前半戦を1敗で乗り切った。しかし後半になるといつものように負けが続き、千秋楽に日馬富士を破って様にはなったが10勝5敗。

琴奨菊は前半を1敗で抜けて何とか復調かと思わせたが、後半失速した上に千秋楽に休場で8勝6敗1休。今年の六場所の勝ち星は9勝・8勝・6勝(負け越し)・8勝・11勝・8勝で52勝。

カド番の豪栄道は、千秋楽に窮鼠猫を噛むという表現がぴったりの首投げで辛勝してようやく8勝7敗。

今年の六場所の勝ち星は8勝・8勝・8勝・9勝・7勝(負け越し)・8勝で48勝にしかならない。

大関は連続負け越しをしなければ陥落しないという特権のある地位、そこに四人(時には五人のこともあった)もいてこの程度の出来映えというのでは少々問題のような気がする。大関の技量審査場所を作って一人二人のふるい落としをしなくても良いのだろうか？

< 4 > 場所を盛り上げた力士たち

今場所活躍した力士を上げるとなれば、嘉風・勢・松鳳山。他には目立った力士が見当たらなかった。

西小結の嘉風は33歳、このところ数場所大活躍が続いており、毎場所大物喰いで話題を集めている。先場所まで10勝以上が続き今場所も活躍が期待されていた。初日鶴竜、二日目稀勢の里と連続で破り、この先どうなるのかと期待がさらに膨らんだが、8勝7敗で終わった。とは言っても、負けた相撲の内容にも評価に値する相撲は多く、成績以上の内容だった。前進を続けながら休むことなく矢継ぎ早に攻めの手を繰り出して行くという基本姿勢が貫かれており、見ている方も清々しい気分になることができる。

若い頃には、ピョコピョコ飛び跳ねながらやや無駄が多い相撲っぷりだったが、30歳を過ぎてから一変して相撲の形が変わり、「自分でも相撲を楽しみ、見ている人にも感動を与える相撲」(本人談)が多くなってきた。勢は右四つの型ができており、右四つになれば上手からの投げも下手からの投げもでき、強い引きつけからの寄り身もある。しかし右四つになれないと脆いという弱点があったが、この数場所「とにかく前へ出て行き、前へ出て行きながら展開の中で得意の型になれば・・・」という相撲に変わってきた。これにより、立ち合いの攻防の中で相手陣地にぐいぐい攻めて行くので、それだけで勝機をつかむことができるようになってきた。前頭4枚目で12勝3敗は進歩の足跡を感じさせる内容で、来場所も活躍が期待できそうな気がする。

突き押しを基本とした相撲だった松鳳山は、十両に陥落したが好成績を上げて戻ってきた。これまでは短軀ながら長身の相手にも伸びあがるようなど輪攻めをする無理のある突き押し相撲が目立ったが、立ち合いの鋭い出足と突き押しで勝負がつかなければ、素早く次の手に移って寄り身でも投げでも対応できるようになった。西前頭10枚目で上位陣とはあたらぬ地位だが12勝3敗は充分評価できる。脇を締めずに力任せに打ちつける上手投げが目立ち少々気になったが、脇を締めて下に向かって打つ投げに変えて行けば怪我も回避できるし今後の発展が期待できる。何と言っても、あの毅然とした面構えは大好きだ。

< 5 > 行司差し違い

ここ数年物言いがつく勝負が増える傾向にあるが、勝負判定に公平を期すという意味では悪いことではない。ところがその結果「行司差し違い」という結果になるケースが少しずつ増えているように感じる。

今場所はただ一人の立行司式守伊之助が差し違いを繰り返し三日間の出場停止処分になった。

いずれの一番もさほど混沌とした取組の流れでもなく、テレビ機軸で見ているとあきらかに判るような内容だったのが気になった。

昔は立行司に過ちは許されず、万が一にもそのような事態が発生すれば命をもって償うべしとのことから装束の中に短刀も含まれていた。その名残で現代でも立行司の正装を見ると腰に短刀を差している。実際には

切腹をすることはなく「進退伺い」を出すことが多かったようだが、昭和 40 年代だったのだろうか、きわどい勝負で物言いがつき、協議の結果「行司差し違い」ということになったが進退伺いを出すことを拒否して後に廃業に追い込まれた行司がいた。また実際に進退伺いを出したが却下されて丸く収まった例はいくつもあるらしい。そういった事件をきっかけに、ビデオ室で映像からの確認を行う現在の仕組みが作られたと聞いたことがある。

行司の二つの眼による判定、そこに微妙さを感じた時にチェックできる五人の審判と最大四人いる控力士の合計十八の眼による検証、そしてそれを支援するビデオ画像による再確認と一見仕組みは整っているように見えるが問題は多発する。

行司が勝ち名乗りの声を上げ始めてから物言いをつけることがあったり、怪しげな勝負であったのに誰も物言いをつけなかったことなどもあり、五人の審判の目が鋭く輝いているとは思えないことがある。

行司の過ちとして簡単に片付けてしまうのではなく、審判の技量向上も必要だしまだ、それを側面から支援できる情報技術を駆使した仕組みも必要ではないかと思う。

以上